お老～い、したくはできたかい？

みんなで考える「老いじたく」（最終回）

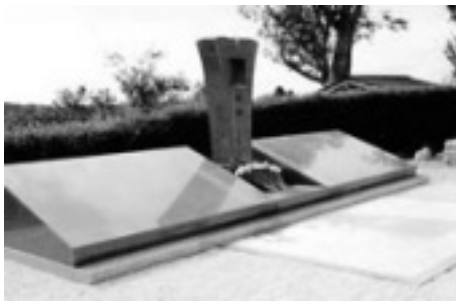
■友の会でお墓を■連載最後を飾るのは「お墓」です。共同墓地をつくった東京の友の会のお話です。

東京・代々木健康友の会では、友の会員を対象にした共同墓地を建立し（写真）、運営しています。きっかけは約一〇年前のこと、特別養護老人ホームづくりを話し合う中で「死後はどうする？」という声があがったのです。

病院の友の会でお墓!?

当初は「病院の友の会がお墓をもつなんてとんでもない」と、反対意見が出ました。しかし、特養づくりの話が出たのも、地域の高齢化がすすんだり、独居が増え、老後の心配が高まったためです。「まず会員の思いを聞こう」と、アンケートをとることにしました。

すると、ひとり暮らしの人、死後に子どもに迷惑をかけたくないと考える人、郷里にお墓があるが遠くて足を運べない人、お墓の管理費が負担だった人…多くの人にとって悩み深い話題だったとわかったのです。また「もう亡くなっている人も入れるか？」「料金は？」など、さっそく具体的な問い合わせも。



この反響の大きさに後押しされて共同墓地づくりが決まりました。検討委員会を結成、場所探しから運営のルールまで作っていきました。土地という財産が発生するため、弁護士にも関わってもらいました。

場所は都心から車で一時間ほどの小高い霊園に決めました。土地の使用権は友の会に帰属。

申し込み者は埋葬・刻銘をして、医療と福祉を守る運動に加わった仲間として永く追悼する。思想信条の自由を尊重し、宗教宗派は問わない。墓地は「きずな」と命名。

運営は友の会ですが、会計は独立しています。申込金と埋葬費（事前に預かることも可能）を払えば、年間管理費などは不要。所定の申込金が払えない会員の場合は事情も勘案することに。

とりくんでよかった

現在、二四〇人が申し込みをしています。申し込みをすませた人たちは「（最期に）行くところが決まった。安心した」「子どもに負担をかけずにすむ」と、一様にホッとした顔をみせるそうです。

毎年九月が定例の合同慰霊祭。バス二台に自家用車も連なり、一〇〇人を超える人たちが墓前に集まります。見学を兼ねて参加する人も。慰霊祭の様子は「お墓通信」というニュースを発行し、報告しています。

代々木健康友の会ではいま、「お墓は最期まで生きてゆくための『安心の要』だった。とりくんでよかった」と、この事業をとらえています。

◆

本連載、一年前の開始時に準備していたお題を実はいくつも積み残して終了します。「最後はどういう治療を受けたい？」「遺言書」「お葬式」「遺影は自分で選ぶ」など。しかしこれは、読者の飛び入り参加やリクエストが入った喜ばしい結果としてお許し下さい。

ほかにも紹介したいお便りはありました。「夫が逝き、独り。『死んだらノート』を作り、気づいたことをメモしています」「おひとり様生活中。巣立った子どもたちが私の誕生日に集まり、毎年もしもの場合を確認することに。最初は驚いた子どもたちですが、最後はお葬式の話で盛り上がりました」など。

本稿が「最期まで自分らしく生きるには？」を、仲間たちと話し合うきっかけになれば幸いです。

（編集部）

ほっと介護 101